

主日礼拝説教「良いものを取り分ける」予稿

日本基督教団石神井教会 2025年9月14日

【旧約聖書日課】列王記上 3章4～9節

⁴王はいけにえをささげるためにギブオンへ行った。そこに重要な聖なる高台があったからである。ソロモンはその祭壇に一千頭もの焼き尽くす献げ物をささげた。⁵その夜、主はギブオンでソロモンの夢枕に立ち、「何事でも願うがよい。あなたに与えよう」と言われた。⁶ソロモンは答えた。「あなたの僕、わたしの父ダビデは忠実に、憐れみ深く正しい心をもって御前を歩んだので、あなたは父に豊かな慈しみをお示しになりました。またあなたはその豊かな慈しみを絶やすことなくお示しになって、今日、その王座につく子を父に与えられました。⁷わが神、主よ、あなたは父ダビデに代わる王として、この僕をお立てになりました。しかし、わたしは取るに足らない若者で、どのようにふるまうべきかを知りません。⁸僕はあなたのお選びになった民の中にいますが、その民は多く、数えることも調べることもできないほどです。⁹どうか、あなたの民を正しく裁き、善と悪を判断することができるよう、この僕に聞き分ける心をお与えください。そうでなければ、この数多いあなたの民を裁くことが、誰にできましよう。」

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 15章35～52節

³⁵しかし、死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかも知れませんが。³⁶愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を得ないではありませんか。³⁷あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です。³⁸神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります。³⁹どの肉も同じ肉だというわけではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉と、それぞれ違います。⁴⁰また、天上の体と地上の体があります。しかし、天上の体の輝きと地上の体の輝きとは異なっています。⁴¹太陽の輝き、月の輝き、星の輝きがあって、それぞれ違いますし、星と星との間の輝きにも違いがあります。

⁴²死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、⁴³蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。⁴⁴つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。⁴⁵「最初の人アダムは命のある生き物となった」と書いてありますが、最後のアダムは命を与える霊となったのです。⁴⁶最初に霊の体があったわけではありません。自然の命の体があり、次いで霊の体があるのです。⁴⁷最初の人土ででき、地に属する者であり、第二の人は天に属する者です。⁴⁸土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです。⁴⁹わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです。

⁵⁰兄弟たち、わたしはこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、朽

ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。⁵¹わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。⁵²最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。

【福音書日課】マタイによる福音書 13章44～52節

⁴⁴「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。

⁴⁵また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。⁴⁶高価な真珠の一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。

⁴⁷また、天の国は次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める。⁴⁸網がいっぱいになると、人々は岸に引き上げ、座って、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てる。⁴⁹世の終わりにもそうなる。天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、⁵⁰燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い者どもは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」

⁵¹「あなたがたは、これらのことがみな分かったか。」弟子たちは、「分かりました」と言った。⁵²そこで、イエスは言われた。「だから、天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている。」

畑に隠された宝【こども説教のために】

わたしたちを日曜日の教会へと呼び集めてくださる「天の父」は、隠されていたものを見つけ出すことがおできになるお方なのです。それぞれに違ったところで生活していて、平日はお互いに会うこともほとんどないわたしたちを、「天の父」はご自分の前にお集めくださったのですから。

「天の父」である神は、「隠れたところを見ておられる」（マタイ 6:4 など）お方ですと、主イエスはおっしゃられました。畑に宝が隠されているのを見つけ出してく下さるお方なのです。隠されている宝を見つけたら、畑ごと全部、ご自分のものにしてく下さるお方なのです。その宝が畑の中にひっそりと隠されたままになっているのを、見守ってくださるお方なのです。

この世界の中で生きるわたしたち一人ひとりのことを、「天の父」がいつも憶えていてくださり、見守ってくださっていることを、わたしたちは、日曜日の教会へと呼び集められるたびに思い起こします。わたしたちは皆、この世界の中で目立たない存在かもしれません。隠れた存在かもしれません。けれども、その一人ひとりを、「天の父」は「宝」としてくださっているのです。その中に必ず一つは「高価な真珠」があると、「宝」のわたしたちの中を探してく下さっていることでしょう。わたしたちの、「悪いもの」ではなく「良いもの」を選び分けてくださるのです。

見つけた人は、そのまま隠して

「敬老の日」に合わせてご高齢の先輩方をおぼえて祝福を祈ることを、毎年重ねてきました。多くの教会が、同様に高齢者祝福の祈りをしていることでしょう。

もっとも、「高齢者」と言うと、いったい何歳からが対象になるのかと問題にされることがあります。わたしの青年時代、母教会では、70歳以上の皆さんが対象だったように記憶しています。20年以上前、前任地の教会に赴任したとき、その教会では75歳以上が対象でしたが、すぐに80歳以上に引き上げられました。教会学校の活動で用意していた祝福カードが間に合わなくなったからです。それでも、大きな教会でしたから、何十人分も用意しなければなりませんでした。

石神井教会では、わたしどもが9年前に赴任してきてからは、90歳以上の方を対象にプレゼントやカードを用意してきました。最初のころに差し上げていた方々は皆、すでに天上の聖徒らの礼拝に加えられていらっしゃる。今年は、こどもの教会では17人分のプレゼントを用意してくれました。日曜日ごとの礼拝に、この礼拝堂で共にあずかれる方々ばかりではありませんが、それぞれの置かれたところで、先に天に迎えられた先達に導かれながら、ひとりの「天の父」を礼拝する群れに加えられていらっしゃるのです。

先輩方の人生の日々のことを、わたしたちは、必ずしも詳しく知るわけではありません。長い信仰生活を送って来られた方もあれば、人生の晩年に差し掛かってから信仰生活に入られた方もあるでしょう。それぞれの人生の歩みの中で、どのように教会に招かれ、主イエスに出会い、神の恵みをおぼえる生活をなさって来られたのか。本当であれば、一人ひとりにお聞かせいただきたいとも思います。できればお語りいただきたいとも思います。けれども、語ることが難しいという方もあるでしょう。あまり語りたくないという方もあるでしょう。

それでもよいのではないのでしょうか。たとえお語りにならなくても、たとえわたしたちが聞かせていただかなくても、天の御父がご存じなのです。一人ひとりの人生をご存じでいてくださるのです。その人生の中で与えられた良いことも悪いことも、すべてをご存じでいてくださるお方がいらっしゃるのです。人には語れない、隠しておきたいことを、天の御父はご存じでいらっしゃるにもかかわらず、それを敢えて暴露したりなさらないのです。**そのまま隠して**おいてくださるのです。

主イエスから「**天の国**」のことを学ぶ教会は、お互いにそのことを大切にするのです。わたしたちは皆、天の御父の子らだからです。御父がご存じでいてくださるならば、互いに詮索し合うことはありません。

《倉》から取り出して…

もちろん、わたしたちは、自分の意志で語ろうと思うときには、お互いの間で包み隠さず語っても良いのです。隠していたことを勇気をもって口にしたとき、ただ黙って聞いてくれる友がいるならば、幸いなことです。何の論評もせず、余計な助言もせず、他のだれかに告げ回ったりもせず、ただ静かに聞いていてくれるだろうと思えるならば、語れること、隠さずに話せることが、あります。

ただ、残念ながら、わたしたちはしばしば、口をつぐむのです。隠さずにいられなくなるのです。自分の中にしまい込み、蓋をして、自分自身でも見ることのないように、耳にすることがないように、封印してしまうことさえあるかもしれません。わたしたちの人生には、そうしないではいられないようなことが、山ほどあるのです。良いことにしろ、悪いことにしろ、あるのです。他の人から見れば大したことでなくても、自分にとっては、隠して、封印しておくしかないと思われるようなことが、ある。

牧師として、皆さんのご葬儀を執り行うとき、故人の人生をどのように紹介しようかと思ひ悩むことがあります。故人を良く知らなくて悩むこともあります。知りすぎていて悩むこともあるのです。牧師として、他の人には語られなかったであろう思いをお聞きしていたり、隠されていた事実を知らされていたりすることが、あるからです。牧師によっては、その人の人生の良い局面、だれもが褒めるような業績を並べ立てて紹介する者もあります。けれども、わたしは、できるだけ故人の人生のさまざまな側面をバランスよく紹介したいと考えるのです。そのとき、あまり知られていないこと、もしかすると隠しておきたいと思われていたかもしれないことを、お話ししても良いのだろうかと思案しないでいられなくなります。お話ししないほうが安全なのではないか、と考えることも少なくありません。

それでも、わたしは、その人の人生のすべてを神がご存じでいらしたということは、はっきりとお話しするでしょう。

わたしたちは、そのことを主イエスから学んでいるのです。「**天の国**」では、天の御父がすべてをご存じでいらっしゃるのです。わたしたちが隠し続けていたことも、すでに見つけ出されています。わたしたちの中の「**良い真珠**」を取り出して、世に知らしめようともしてくださるお方です。わたしたちの中に「**良いもの**」も「**悪いもの**」もあることをご存じで、その中の「**良いもの**」こそが残されるようにと願ってくださっているお方です。そのお方の御国へと招かれているわたしたちは、ときに自分の中にある「**倉**」を開いてみるのです。教会へとお集めくださる御父の御前で、棚卸しをしてみるのです。そこにある「**良いもの**」を、御父はお喜びくださっているのです。